

『環七ハイヒール』

**

このエピソードは友人から聞いた話である。

もしかしたら彼は、話を面白おかしくするために事実とは異なったユーモアを何滴か垂らしている可能性があるかもしれない。

問い詰めたところ彼は、『盛るわけあらへんやろ。もし盛っていたとしたら煮るなり焼くなり好きにしてくれや。それくらいありのまんまを伝えたんやから』と言い張るので僕は仕方なく受け入れることにした。

だからこれは現実世界に起こったノンフィクションとして聞いて欲しい。

*

彼は、この世界に生まれ落ちてから一睡もしていない。

両親もそうだった。小学生の頃に友人たちが睡眠時間についての会話を聞いて、『珍しい家庭もあるもんだ』と思っていたらしい。

中学校に進学した彼に待ち受けていたのは、『自分の方が珍しい家庭だったんだ』という現実だった。友人五人に、『一日の睡眠時間はどれくらい?』と訊ねてみると、全員が『八時間くらい?』と答えるものだから彼は、『一日の八時間を睡眠に費やしている彼らの脳みそは腐らないのだろうか?』と疑問に思っただけだった。

後には必ず、『あなたは何時間くらい?』と質問を返してくるものだから彼はいつも、『同じくらいだよ』と死んだ魚のような目をしながら答えていた。

高校や大学へ進学すると、睡眠不足自慢をする人間たちがちらほら出てきた。

「俺、昨日二時間しか寝てへんわ」

「僕もこの前、三十分だけだったよ」

「俺なんてテスト週間は全部合わせても一時間いかへんのちゃうかな?」

「僕なんて生まれてから一睡もしてないよ」

「そんなの……ムリムリ」

場を囲んでいた彼以外の全員が突っ込みを入れて会話はいつも終わりを迎える。

この世界に生まれ落ちてから一睡もしていない彼は、その日も眠っていなかった。

朝の八時に家を出るはずが、『夜だからこそ言える話』の再放送に夢中になっていた。
(どうしてそんな時間に放映されていたのだ?)

気が付いたときには八時五分を過ぎていたものだから、彼は慌てて家を飛び出した。
もし万が一遅れてしまった時の言い訳として、『寝坊』というワードが脳裏を過った
が、睡眠に関しての嘘を付くことを考えたら謝る方が気楽だった。

しばらくして、『コツ、コツ、コツ』と後ろから物音が聞こえた。

彼は振り返った。すると鬼の形相をした女性が全速力で走っていた。けれども、ハイヒールを履いているものだから表情に比べてスピードは遅くみえた。『なんか悪い気がするから追い越して貰おう』と思った彼はペースを緩める。

どうぞ追い抜いて下さい。

さぞお急ぎなのでしょう。

さあ、どうぞどうぞ。

と、心の中で唱えながら彼は、彼女が通り過ぎるのを待った。

いつまで経っても彼女のハイヒールの音が近づいて来なかった。かといって、どこか脇道に逸れて足音が聞こえなくなるわけでもなく、『コツ、コツ、コツ』と一定の距離が保たれた彼女の足音が耳の中に入り込んでくるだけだった。『可笑しいなあ』と思った彼は気を使いながら振り返る。すると、先程とまったく同じ距離間でまったく同じ形相をする彼女の姿が視界に入り込んできたのだった。

思わず、『デジャブ?』と呟いた彼は気まずさを感じないわけにはいかなかった。『全力で走る彼女とジョギングで走る自分のペースが全く同じってどういう状態なんだ?』と、思った友人は頭をフル回転させた。

今すぐ立ち止まって彼女に追い抜いて貰ったほうがいいのか?
でも、そうすると彼女を馬鹿にしているみたいだよなあ。

『君、全力疾走なのに全然進んでいないから止まってあげよ』と偉そうな人間に見えてしまう恐れがあるなあ。かといって、今すぐ全速力で走りだしても、『君の全速力ってそんなもん? 俺の全速力ってこういうことだから』と格好つけているように思われるかもしれないなあ。

不幸中の幸い、とはこういうことを言うのだろうか？
最寄りの駅の看板が見えてきた。

『一歩ずつ進んでいけば、必ず終わりを迎える。同じ状態が永遠に続くことはないのだ。諦めて立ち止まるからゴールにたどり着けないのだ』と昔テレビ番組で誰かが言っていた記憶を思い出した彼は、小さくガッツポーズをした。

改札を通して、プラットホームへ向かうために階段を下りていく。

「間に合った」

『まもなく三番線に……』と駅員さんのアナウンスが流れてきた。

電車が走る音が微かに聞こえてきて、『これで寝坊を言い訳にしなくて済む』と感じた彼の胸は撫でおろされた。

『コツ、コツ、コツ』

彼は振り返った。すると、鬼の形相をした女性が全速力で走っていた。しかし、ハイヒールを履いているものだから表情に比べてスピードは遅く見えた。彼は、『逆にずっとその表情とペースで走れることの方が凄くない？』と思っただけ。

電車が、プラットホームに到着した。

そして、扉が開いた。

電車に乗り込んだ彼は安堵して座席に腰掛けた。

そして、前を向く。

『どうしてまだ、その表情をしているの？』

鬼の形相をしている彼女が目の前席に座っていた。

さっきまでは振り返らない限り彼女の表情が見えなかったからまだ良かったけど、今は嫌でも視界に入ってしまう。『彼女の形相を見ないためには振り返らなければならないとは皮肉なものだ』と思った彼は、俯くという選択肢を取った。

『ハア、ハア、ハア』

と肩で息をする彼女の吐息が聴覚を刺激する。嫌でも彼女の形相を連想してしまう。

『直接見ていないのに、どうしてこんなに鮮明に映し出されるんだ？』と残像の威力に脅威を感じた彼は、電車の中で小刻みに震えていた。

直接見たくないから俯いているのにも関わらず、鬼の形相がくつきりと鮮明に浮かび上がってくる。どうしていいのか分からなくなった彼は一瞬だけ、目の前に座る彼女の表情を確認することにした。

あれ？

思っていた形相よりも、若干薄い気がした。彼はすぐさま俯きなおし、記憶の中の形相と照らし合わせようとする。ああ、やっぱりそうだ。記憶に映る彼女の形相の方が濃い！
一体、これはどういうこと？

彼は車内で失神しかけていた。『あと三駅で降りる。それまで辛抱できるのだろうか？』と思った彼に救いの思考が手を差し伸べた。

もしかすると、彼女は次の駅で降りるかもしれないよ？

彼は小さくガッツポーズをした。『狙い通りに事が運べば願ったり叶ったりだ。鬼の形相を見なくても済む！』と安堵した。

電車が止まって扉が開いた。
しばらくして、閉まった。

彼の肉体が、動き出す電車の揺れを感知する。
薄目を開けて目の前の彼女の有無を確かめた。

鬼の形相は、まだ肩で息をしていた。

改めて考えてみると、『この状況、異様すぎないか？』と、冷静に捉えていた。
一駅過ぎても彼女は鬼の形相のまま、まだ肩で息をしている。

周囲の乗客たちは気が付いていないのだろうか？ それとも気が付いてはいるものの、触れてはいけないという暗黙の了解のおかげで誰も一步を踏み出さないのだろうか？

仮に今、肩で息をする彼女に人差し指を向けて、『この人間の存在を異様だと思っている人は手をあげて下さい!』と大声で叫んだのであれば、反応して手をあげられる人間はどのくらい居るのだろうか?

「多く見積もっても君を含めて三人くらいじゃない?」

と、車掌のアナウンスが聞こえた。彼はアナウンスが聞こえた方向に視線を送り、キョロ、キョロとした。でも、よくよく聞いてみるとただ乗り換えのアナウンスを行っているだけだということに気が付き、自分の耳を著しく疑った。

いっそのことを目を瞑って眠りの世界へ飛び込んですべてを忘れてしまいたい。という願望が彼の中に現れたのだが、『その願望が満たされることはありません』と脳裏に浮かぶ彼の両親が一刀両断。『我が子よ、あなたは一睡もできないのだから!』

左側に目をやると、金髪の兄ちゃんがよだれを垂らして眠っていて、右側に目をやると、ポニーテールの姉ちゃんが大口空けて眠っていた。

前方に目をやると、瞳孔ひらきっぱなしの女性が大きく肩で息をしていた。

気が付けば、二駅目が過ぎていた。彼は見慣れた形相がまだ目の前に座っている真実に安心していった。何事もそうだ……慣れれば怖いものなどない! 慣れるまでに達しないから恐怖を感じるのだ!

彼は思い切って鬼の形相を睨みつけてみた。『もしかすると進展が見られるかもしれない!』というポジティブシンキングが彼を行動に移させたのだろう。

それから二分間……彼は形相を凝視した。彼女は表情ひとつ変えることなく鬼の形相を保ったまま肩で息をしていた。後ろにも前にも転ばない展開が、彼をやきもきさせた。

もうすぐ、降りる駅に到着する。車掌のアナウンスが、彼が降りる駅名を告げた。

電車が止まる前に立ち上がり、扉の前まで歩を進め、降りる準備を始めた。

「なんだか夢を見ているようだなあ。眠ったことないけど」

ひとり呟く彼は、『夜だからこそ言える話』の再放送を見ていたからこんな出来事にくわせたんだ、と感嘆のため息を漏らしていた。

ありがとう、ハイヒール。

ありがとう、オニノギョウソウ。

扉が開いたとき、『最後にもう一度だけ』と名残惜しんだ彼は鬼の形相を見納めるために振り返った。

「まじかよ……」

鬼の形相はすぐ後ろに居た。

その距離、わずか三十センチメートル。

「さすがに想定外だぞ」と独り言を漏らした彼は、慌てて電車を降りた。

プシュー。

彼は、何も考えずに思いっきり走った。全速力で階段を上って、改札を抜けて、待ち合わせの場所へ向かった。

さすがに、精神の崩壊が近づいてきている。

待ち合わせ場所は、駅から徒歩十分圏内だった。このまま走り続ければ、約束の十分前には着いてしまうだろう。でも、それはそれで万々歳だ。

なぜなら、十分前行動は素晴らしいとされていることだから！

全速力で走りながら爽快感を抱いている彼の耳の中に、『コツ、コツ、コツ』という物音が聞こえてきた。

『嘘だろ？ これは空耳に決まっている』と思った彼は、走る速度を緩めることなく振り返ってみせた。

すると、一定の距離を保った彼女の姿が視界に入り込んできたではないか。

『どうして？』とシンプルに自問自答した彼の思考は渦を巻き始めていた。

ジョギングしても、車内に座っても、全速力で走っても、一定の距離を保ってくるこの人間は一体、何者なんだ？ これでは完全に自分が標的になっているではないか。まるで、今朝家を出たときから追われることが決められていたかのようだ。

あ、もしかして……狙われている？

友人は突然、立ち止まった。

「初めから、俺を狙っていたのか？」

「ついに認めたか」

と彼女は言った。

「初めからこうなることが分かっていたら電車に乗る前にケリをつけられたのになあ」と指をボキボキ鳴らす友人は世界観に入り浸っていた。

「ここまでたどり着いたのはアンタだけだよ」

と彼女は言った。

「永遠の眠りにつかせてやる」

「あいにく、俺は生まれてから一度も眠ったことがないんだ」

「そんな出鱈目アタシには通用しないよ」

「それが嘘じゃないから恐ろしいんだよなあ」

「……う、うそでしょ？」

「嘘じゃない！　ちなみに、俺の両親も眠ったことがない！」

驚きを隠しきれない彼女の真顔は、物凄く整っていた。鬼の形相しか見たことがなかった彼は、彼女の美しさに不意打ちを食らい、思わず見とれてしまった。

「まるで、眠れぬ森の美女みたいだ」

「私はロングスリーパーだから眠りまくっているけどね」

彼女の凜とした態度に感銘を受けた友人は一つ首を振り、意識を内側に戻した。

「お前の話に惑わされるほど、俺はやわじゃない」

彼は、自らが創り出した世界観に飲み込まれているみたいだった。

「眠らな過ぎて脳みそ腐ってるんじゃない？」

彼女の方がよっぽど冷静だった。

「なぜ、俺を狙っている！」

「アンタが落し物したから届けようと思ってここまで来たんじゃないの」

「え、そうなの？」

彼は、両手でポケットを確認した。

財布もある。携帯電話もある。

それ以外には何も身に付けていない。

俺は一体、何を落としたのだ？

彼女はハイヒールを脱ぎ始めた。

そして、脱いだハイヒールを両手で持ちながら彼の目の前に差し出した。

「このハイヒール、アンタのものでしょうか？」

「んなわけあるかつ。やめさしてもらおうわ」

彼はその後、鬼の形相をした女性（名前を訊ねたら『石塚です』と律義に答えてくれたらしい）に、煮られて、焼かれて、好きに扱われたらしい。

*

「どう？ 本当にあった友人の話」

「これのどこがノンフィクションやねん！ もうええわっ」

センターマイクを挟んで並ぶ僕たちは、客席に一礼をした。

舞台上から袖にはけると、満足そうな表情をしている相方を見て僕まで嬉しくなっていることに気が付いた。瞬間、彼と『環七ハイヒール』という漫才コンビを組めたことが誇らしくて仕方がなかった。